

# 原告 角谷樹環 意見陳述

2025年5月29日

こんにちは。角谷樹環と申します。現在は東京の大学に通っており、18歳です。私は15歳の頃から気候変動への具体的な対策を求める活動をしてきました。気候変動は私にとって、その解決なしに未来を考えることができないほど重要なものであり、そして身近なものです。気候変動について考えない日はありません。

私は北海道で生まれ育ちました。その北海道は今、変わりつつあります。雪の量や振り方が変化し、暑さが極端になりました。気候の変化によって、姿を滅多に見なくなった動植物もいます。未来は希望ではなく、不安そのものになりました。私はまさにいま、取り返しのつかなくなる日が近づいているのを感じています。気候変動が認識されてからの数十年、多くの命が失われ、多くの種が絶滅し、自然環境が変化しました。私は、自分自身がその加害の構造の一部にいると感じているからこそ、これ以上、誰かや何かを壊したくありません。これ以上、眠れない夜を過ごしたくありません。

こういった思いから私はできることを全てやりたいと考えるようになり、気候変動への解決策を求める活動に参加することを決意しました。活動の最も初期に参加したのは、衆議院選挙の際に国政政党の方々と行なった気候変動政策に関する政策討論会です。私はこのアクションをきっかけに気候変動への解決を目指す上で政治がいかに大きな影響を与えるか、自分たちの代表として誰を議員に選ぶかがどれほど重要かを痛感しました。以降、私は気候変動政策に最も関心を持ってアクションを行っており、未成年者が選挙運動を禁止されていると知ったのも、2022年

7月の参議院選挙の選挙期間に実施されたアクションを通してでした。私は「#選挙で聞きたい気候危機」という団体のアクションに参加し、選挙候補者に「センキキレター」という質問状を通して気候変動政策についてインタビューを行う計画を立てていました。しかし、最終的に私は候補者に直接このレターを届けることを諦めることとなります。その背景には、「未成年者は選挙運動をしてはいけない。手紙を届けることはルールに反する可能性がある」という、実行委員の一人からの指摘がありました。

この経験以来、私は、未成年者の選挙運動禁止という問題にずっと違和感を感じています。選挙運動は、自分の思い代弁してくれる候補者への応援を通して社会に自分の声を届けることのできる、ごく当然の権利だと、私はずっと信じていました。だからこそ、私が未成年者の選挙運動が禁止されているという事実を知った際、本来持っているはずの「声を伝える権利」を突然失ったように感じたのだと思います。

現在の法律は、「未成年は搾取されるかもしれないから守る」という建前で18歳未満を排除しています。しかし、そのリスクを理由に、すべての未成年者から社会に参加するチャンスや、表現する権利を制限ことが、果たして理想的なのでしょうか。本当に必要なのは、未成年者を排除することではなく、主権者教育や未成年者を搾取する側へのアプローチを通じて、進学届が主体的に社会に関わる道を開くことなのではないでしょうか。特に、気候変動という問題に注目した際、将来世代により多くの影響を与える問題であるからこそ、強い当事者意識を持つ若い世代もまた、意思決定の場に席をおく必要があると思います。そして、少なくとも私はその場に、被選挙権のない私の世代の意見を代弁し、将来世代のことを真剣に考える方の存在があることを強く、切実に願っています。

この法律は、若者が「沈黙」を選ぶことを求めています。意見を表明することをあ

きらめ、ただやり過ごすことを選ぶ。その空白は不条理であるだけでなく、次の時代の民主主義を蝕んでいくのではないのでしょうか。

近年、「若者の政治参加が必要だ」という声がよく聞かれるようになり、立候補年齢の引き下げも議論されはじめました。しかし、未成年者が本当に信頼し、心から応援したい候補者を見つけたとき、それを全力で支える自由すら、今の法律は許してくれません。

たとえ投票権をもっていなくとも、未成年者は主権者であり、主権者の声を尊重する社会にこそ未来があるはずです。だからこそ、この裁判が、未成年者の声に正面から向き合い、時代にふさわしい新しい判断を示してくれることを心から願い、信じたいと思います。

以 上